

度量衡の故里・中国を訪ねる旅*

岩田 重雄**

1. はじめに

日本の度量衡制度が中国を源流とすることは、古来からいつたえられてきた。特に近世以降は多くの研究が行われている。しかしこれらの研究は源流となる地域と伝播した地域が、あらゆる方面から共同で研究をすることによって、はじめてその全体のすがたがつかめてくるものである。

株式会社21世紀旅行は1995年8月から「度量衡の故里・中国を訪ねる旅」を企画し、これに日本計量機器工業連合会、日本計量新報社、日本計量史学会が協力した。幸い中国側の理解ある協力がえられたので、短期間に多くの成果をあげることができた。ここにその概要をまとめ、今後の参考に供したい。

2. 準備段階

最初の通信は日本計量機器工業連合会専務理事の山崎信雄氏と、中国の国家技術監督局国際合作司副司長の鄭永光氏の間に1995年10月に開かれた。ついで21世紀旅行社長の斎藤和弘氏と中信旅遊総公司日本部長の王耘氏との間で、旅程の立案、ガイドの人選がはじまった。

一方、中国の計量史の研究をしている国家技術監督局管理研究所の丘光明氏は1995年10月20日に来日され、大阪の第18回計量史をさぐる会で講演をされた後、各地の計量史資料館を歴訪された。さらに日本計量史学会の有志と懇談され、最初に中国と日本の計量史交流の道を拓かれた。丘氏は在日中にこの計画を聞き、帰国後の10月30日付で早速活動状況を筆者に通知された。

「貴国の計量代表団が中国への観光訪問団を組織するという希望については、まず私の所属する部門の幹部が、熱烈な歓迎の意を示しております。この他、私は中国歴史博物館の館長と中国社会科学院歴史研究所の所長にそれぞれ電話をかけ、彼らの熱心な指示も得ております。中国歴史博物館の館長俞偉超先生は、代表団が北京にいらっしゃれば、館内の倉庫に所蔵されている歴代の度量衡の文物を出してきて、代表団のメンバーに単独で鑑賞させてくれるよう便宜をはかることを即座に承知してくれました。上海博物館は電話が通じませんでしたが（これから手紙で連絡するつもりです）、更に問題ないと思います（上海博物館の館長は私の友達です）。中国社会科学院歴史研究所の所長李学勤先生は、歴史学、考古学、古文字学方面の現在における権威であり、私と各地の博物館の意志疎通を助けるためにできる限り努力し、代表団が中国滞在中のあらゆる要求をできるだけ満足させると言っております。」

かくして中国側と日本側はそれぞれの国内の連絡を緊密にとりながら、3ルートで通信を行った。頭初の計画は北京－西安－長沙－上海であったが、丘氏の意見により北京－西安－洛陽－鄭州－上海に変更され、一層内容の充実した見学ができるようになった。この間、日本計量新報社は何回もこの計画を日本計量新報に記事として掲載し、参加を促進した。

*1996.7.31

**〒175 東京都板橋区高島平4-16-1

3. 代表団の結成と旅程

日程が3月26日～4月3日と年度の変り目であったため、人数を確定するのに3月上旬までかかった。
表1に団員名簿を示した。

表1 団員名簿

【団 長】	岩田 重雄 日本計量史学会 副会長 東京都板橋区高島平4-16-1 ☎(03)3979-9117	〒175
【秘書長】	山崎 信雄 日本計量機器工業連合会 専務理事 千葉県佐倉市江原台1-21-1 ☎(043)486-1908	〒285
【団 員】	入野 博 はかりとますの資料館 館長 東京都大田区東雪谷1-19-4 ☎(03)3727-2410	〒145
【団 員】	大西 寅一 大西計器株式会社 社長 大阪府東大阪市長栄寺21-19 ☎(06)782-0024	〒577
【団 員】	大橋 静香 無職 長野県岡谷市南宮1-1-15 ☎(0266)23-3322	〒394
【団 員】	小川 忠治 小川計量士事務所 計量士 神奈川県横浜市瀬谷区三ツ境58-18 ☎(045)362-7807	〒246
【団 員】	金森 直治 金森度量衡店 社長 愛知県名古屋市北区志賀町5 東志賀荘2-304 ☎(052)914-4703	〒462

- 【団 員】 神谷 茂
株式会社タニタ 取締役 相談役
東京都板橋区常盤台1-49-11 〒174
☎(03)3967-8804
- 【団 員】 郡 英之
株式会社 築地計機製作所 社長
東京都中野区若宮3-48-11 〒165
☎(03)3338-0603
- 【団 員】 小山 幸治
有限会社小山はかり工場 社長
長野県松本市渚4-12-4 〒390
☎(0263)25-3740
- 【団 員】 小山 キセ
有限会社小山はかり工場
長野県松本市渚4-12-4 〒390
☎(0263)25-3740
- 【団 員】 斉藤 和義
株式会社近鉄百貨店 課長 計量士
東京都三鷹市下連雀3-43-7 〒181
☎(0422)43-5846
- 【団 員】 関 欽司
東京都計量検定所 課長代理
東京都三鷹市大沢1-1-29 〒181
☎(0422)33-0715
- 【団 員】 田代 美子
無職
長野県岡谷市長地3067-2 〒394
☎(0266)28-2500
- 【団 員】 寺戸 常三郎
株式会社静岡コピーセンター 会長
駿府はかり資料館 館長
静岡県静岡市千代田3-7 〒420
☎(054)246-1313

- 【団 員】 西野 一宏
川鉄アドバンテック株式会社 相談役
千葉県習志野市鷺沼台 3-14-21 〒275
☎ (0474) 73-4706
- 【団 員】 松村 恒夫
埼玉県計量団体連合会 会長
埼玉県川越市末広町 3-12-10 〒350
☎ (0492) 25-6650
- 【団 員】 宮澤 喜秋
無職
長野県岡谷市川岸東 4-11-28 〒394
☎ (0266) 22-6258
- 【団 員】 矢崎 滯子
行政書士
長野県岡谷市長地 3067-2 〒394
☎ (0266) 28-2500
- 【随 員】 谷口 弘人
株式会社 21世紀旅行
東京都千代田区神田錦町 1-4 〒101
☎ (03) 5281-2460

中国側の好意で丘氏が代表団に同行され、専門的な説明を行なった。旅の記録は表 2 に示した。2 日目に中国の度量衡関係者との交流会が開かれた。

表 2 旅の記録

I. 3月26日(火曜)

8時15分	成田空港 3階出発ロビー	集合
10時37分	全日空 (NH) 905便	離陸
----- [時差 - 1時間] -----		
14時08分	北京首都空港	着陸
【出迎え】	中信旅遊総公司	李中南
14時58分	北京首都空港	出発
15時40分	天壇公園	(参観) 到着

1 6 時 3 8 分	天壇公園		出発
1 7 時 1 4 分	白麗宮酒店	(夕食)	到着
【出迎え】	中信旅遊総公司	董春秋	※全線通訳
1 8 時 2 2 分	白麗宮酒店		出発
1 8 時 5 5 分	北京昆崑崙飯店	(宿泊)	到着

II. 3月27日(水曜)

8 時 1 5 分	北京昆崑崙飯店		出発
9 時 2 6 分	華芸商場	(休憩)	到着
9 時 5 6 分	華芸商場		出発
1 0 時 2 5 分	明の十三陵〔定陵〕	(参観)	到着
1 1 時 3 5 分	明の十三陵		出発
1 1 時 5 9 分	北京金殿友誼商店	(昼食)	到着
1 3 時 1 6 分	北京金殿友誼商店		出発
1 3 時 5 0 分	万里の長城〔八達嶺〕	(参観)	到着
1 4 時 5 5 分	万里の長城		出発
1 6 時 5 4 分	北京昆崑崙飯店	(休憩)	到着
1 7 時 2 5 分	北京昆崑崙飯店		出発
1 7 時 2 8 分	京城大厦		到着
	〔日本中国度量衡関係者 交流会〕		
1 9 時 4 5 分	京城大厦 1 F 『両宜軒』	(懇親夕食会)	
2 1 時 1 2 分	京城大厦		出発
2 1 時 1 6 分	北京昆崑崙飯店	(宿泊)	到着

III. 3月28日(木曜)

8 時 0 7 分	北京昆崑崙飯店		出発
8 時 4 5 分	天安門広場		到着
	天安門広場	(散策)	
	国立歴史博物館	(参観)	
	皇家友誼商店	(休憩)	
1 1 時 0 5 分	国立歴史博物館前		出発
1 1 時 1 6 分	故宮博物院	(参観)	到着
1 2 時 3 0 分	故宮博物院		出発
1 2 時 5 3 分	仲仟潮州酒店	(昼食)	到着

1 3 時 5 0 分	仲仟潮州酒店		出発
1 4 時 0 8 分	琉璃廠	(買物)	到着
1 5 時 2 1 分	琉璃廠		出発
1 6 時 2 5 分	北京首都空港		到着
1 8 時 1 5 分	中国西北航空 (WH) 2 1 0 8 便		離陸

1 8 時 1 5 分	西安空港		着陸
【出迎え】	西安天馬国際旅行社	曲永紅	
	西安空港内『シルクロード』	(夕食)	
2 1 時 0 5 分	西安空港		出発
2 2 時 1 2 分	西安唐華賓館	(宿泊)	到着

IV. 3月29日(金曜)

9 時 0 2 分	西安唐華賓館		出発
9 時 0 5 分	大雁塔	(参観)	到着
9 時 5 5 分	大雁塔		出発
1 0 時 1 5 分	碑林博物館	(参観)	到着
1 1 時 2 4 分	碑林博物館		出発
1 1 時 4 0 分	西安米盛衰友誼商店	(昼食)	到着
1 3 時 2 2 分	西安米盛衰友誼商店		出発
1 3 時 2 5 分	陝西省歴史博物館	(参観)	到着
1 6 時 4 6 分	陝西省歴史博物館		出発
1 7 時 1 1 分	城壁〔西門〕	(参観)	到着
1 7 時 3 8 分	城壁〔西門〕		出発
1 7 時 5 9 分	東方大酒店	(夕食)	到着
1 9 時 0 5 分	東方大酒店		出発
1 9 時 1 6 分	西安唐華賓館	(宿泊)	到着

V. 3月30日(土曜)

8 時 3 0 分	西安唐華賓館		出発
9 時 1 8 分	華清池	(参観)	到着
1 0 時 0 6 分	華清池		出発
1 0 時 2 0 分	兵馬俑博物館	(参観)	到着
	〔1号坑／2号坑／3号坑／銅馬車〕		

1 2 時 2 6 分	兵馬俑博物館		出発
1 2 時 5 5 分	萬年飯店	(昼食)	到着
1 3 時 5 3 分	萬年飯店		出発
1 4 時 0 6 分	半坡遺跡博物館	(参観)	到着
1 5 時 0 5 分	半坡遺跡博物館		出発
1 5 時 3 7 分	西安民間芸術館	(買物)	到着
1 6 時 1 7 分	西安民間芸術館		出発
1 6 時 2 0 分	興慶宮公園	(参観)	到着
1 7 時 1 0 分	興慶宮公園		出発
1 7 時 2 6 分	西安米盛衰友誼商店	(餃子宴)	到着
1 9 時 1 8 分	西安米盛衰友誼商店		出発
1 9 時 3 5 分	西安唐華賓館	(宿泊)	到着

VI. 3月31日(日曜)

8 時 3 2 分	西安唐華賓館	出発
8 時 5 5 分	ホテルロイヤル西安	到着
	〔自由行動／弁当手配〕	
9 時 2 6 分	ホテルロイヤル西安	出発
9 時 3 6 分	西安駅	到着
1 0 時 2 0 分	旅游列車 6 号	発車

1 7 時 2 3 分	洛陽駅	到着
【出迎え】	洛陽中国国際旅行社	薛鶴南
1 7 時 3 1 分	洛陽駅	出発
1 7 時 4 6 分	家御閣	(夕食－日本食)
1 8 時 4 5 分	家御閣	出発
1 8 時 5 4 分	洛陽牡丹大酒店	(宿泊)

VII. 4月 1日(月曜)

9 時 0 2 分	洛陽牡丹大酒店	出発
9 時 5 5 分	竜門石窟	(参観)
1 1 時 2 7 分	竜門石窟	出発
1 2 時 0 1 分	涼石城	(昼食)
1 3 時 0 9 分	涼石城	出発

1 3 時 1 5 分	洛陽牡丹大酒店	(荷物積み)	到着
1 3 時 2 5 分	洛陽牡丹大酒店		出発
1 3 時 2 7 分	洛陽工芸美術館	(買物)	到着
1 4 時 0 1 分	洛陽工芸美術館		出発
1 4 時 2 5 分	古墓博物館	(参観)	到着
1 5 時 3 0 分	古墓博物館		出発

1 7 時 3 0 分	鄭州河南国際飯店		到着
【出迎え】	河南省旅游総公司	李玉珍	
1 8 時 3 2 分	鄭州河南国際飯店		出発
1 8 時 3 6 分	海天大酒店	(夕食)	到着
1 9 時 3 6 分	海天大酒店		出発
1 9 時 4 2 分	鄭州河南国際飯店	(宿泊)	到着

VIII. 4 月 2 日 (火曜)

9 時 0 3 分	鄭州河南国際飯店		出発
9 時 1 1 分	鄭州商代遺跡	(参観)	到着
9 時 3 2 分	鄭州商代遺跡		出発
9 時 4 3 分	鄭州玉石工場	(懇談と買物)	到着
1 0 時 5 1 分	鄭州玉石工場		出発
1 1 時 0 3 分	鄭州空港	到着	
1 2 時 1 2 分	中国南方航空 (C Z) 3 5 9 3 便		離陸

1 3 時 3 6 分	上海虹橋空港		着陸
【出迎え】	上海中国国際旅行社	曲金秀	
1 4 時 0 7 分	上海虹橋空港		出発
1 4 時 1 0 分	海天大酒楼	(昼食)	到着
1 4 時 5 1 分	海天大酒楼		出発
1 5 時 1 2 分	上海市檔案館	(博物館倉庫)	到着
1 6 時 2 8 分	上海市檔案館		出発
1 7 時 1 0 分	上海博物館	(写真ストップ)	到着
1 7 時 2 0 分	上海博物館		出発
	バンド／ガーデンブリッジ散策		
1 7 時 3 6 分	海上明珠	(夕食)	到着
1 9 時 1 6 分	海上明珠		出発
1 9 時 3 8 分	上海新錦江大酒店	(宿泊)	到着

IX. 4月 3日(水曜)

9時02分	上海新錦江大酒店	出発
9時08分	工業展覽館 (買物)	到着
10時05分	工業展覽館	出発
10時45分	七宝鎮人民政府レストラン(昼食)	到着
11時54分	七宝鎮人民政府レストラン	出発
12時17分	上海虹橋空港	到着
14時06分	全日空(NH)920便	離陸
17時11分	成田空港	着陸

中国側の出席者は表3に示した。ここで筆者は過去30年間の日本における計量史の研究を解説した。交流会における丘光明氏と邱隆氏の挨拶をつぎに示した。

表3 交流会の中国側出席者

中国歴史博物館	館長教授	俞偉超
国家技術監督局 国際合作司	副司長 高級工程師	鄭永光
" 情報研究所	主任 副研究員	王金玉 (通訳)
" 管理研究所	副所長 研究員	高声榮 (司会)
" "	研究員	丘光明
" "	助理研究員	楊平
" 雑誌編集部	編輯・記者	邱隆
中国社会科学院 考古研究所	研究員	王世民
" "	編輯室 副主任	白雲翔 (通訳)
中国青年国際人材交流中心 對外聯絡部	副譯審 部長	楊晶 (通訳)
北京大学教授 古文字学家		裘錫圭

ご来場の皆様

この度の「中国度量衡と日本」と題する座談会にようこそご出席下さいました。皆様の貴重なお時間を拝借しまして一言ご挨拶を申し上げます。

中国度量衡は、系統立った完全な科学技術史であります。その萌芽・発生から発展段階に至るまで、歴代の王朝には数の差こそあれ様々な文献や実物が残されており、考証に役立っています。呉承洛は早くも1930年代に、度量衡関係の最初の本「中国度量衡史」を著し、これが私たちの今日の研究の基礎となっています。

私たち度量衡史研究グループは、1960年代の末から中国度量衡史の資料の整理と研究に着手してきまして、「中国古代度量衡図集」「中国古代度量衡論文集」「中国歴代度量衡考」等の専門書及び「中国古代度量衡」「中国度量衡」等の一般書を出版し、また、種々の新聞や雑誌に30篇以上の論文を発表し、様々な角度から系統的に、また、簡潔に中国の度量衡発展史を紹介してきました。私たちがこの業務に携わってきた時間は短いものですので、中国の度量衡と東南アジア各国との比較という問題については、まだ本格的に取り組んでおりませんが、系統的でないちょっとした資料からでも、中国古代においてこの分野ではアジア各国にそれ相応の影響を与えていたことが解ります。日本では、中国の隋・唐の時代に何度も学者を中国に派遣して学習交流を行い、数多くの文献や実物を持ち帰っています。その中には「唐律疏議」及び度量衡の器具も含まれていました。日本の学者小泉袈裟勝先生の紹介によれば、比較的整った日本の度量衡制度は「大宝律令」を制定する時に整理されたものであり、「大宝律令」中の度量衡に関する律令は、ほとんどが「唐律」に基づいて定められたもので、度量衡の器具を違法に使用した場合の処置に関する二か条の法令及び疏議は、原文にほとんど手を加えずにそのまま写した形になっているとのことです。

唐代の文化は朝鮮半島にも相応の影響を与えており、記録によれば、朝鮮の定規には黄鐘尺・造礼尺・营造尺・布帛尺などに分かれています。黄鐘尺は漢代の制度の影響を受けたものであり、造礼尺は唐代の小尺であり、营造尺と布帛尺は隋唐の時代の大尺です。このように唐の文化の東漸の様子が度量衡からも垣間みることができます。

1995年、私は光栄にも日本計量史学会のお招きを受け、岩田重雄先生及び

前田親良先生のお二方の温かいおもてなしを受け、計量史学会が大阪で開催した計量史討論会に参加させていただきだけでなく、各地の度量衡史資料館をも見学させて頂きました。その中には岩田重雄先生の「計量史資料館」・小林健蔵先生の「秤乃館」・寺戸常三郎先生の「駿府はかり資料館」・山下喜吉先生の「はかり資料館」等があり、いずれも極めて印象深いものでした。先だっの友好訪問を通じて、新しいことを沢山学ぶことができ、貴重な文物を目にすることができました。私が感動しましたことは、日本では各界に亘って非常に多くの人が度量衡史研究に携わっているということでした。また、私はもう3年以上も岩田重雄先生と友好的文通をしておりますが、この間に岩田先生から日本及び世界各国の度量衡史研究に関する大変貴重な資料をお送り頂いており、これはこれから私たちが中国及び世界各国の度量衡史の比較研究を行う上で、非常に有用な文献資料となっています。度量衡史研究グループを代表して、この場をお借りして岩田先生に厚く御礼申し上げます。

この度、日本計量史学会で「度量衡の故里、中国を訪ねる旅」を企画され、中国を訪問なさいましたことは、私どもにとりまして大変喜ばしいことです。今回のこの機会を通じて両国間の学術交流が更に深まり、お互いの間の友情が更に深まることを希望いたします。

有り難うございました

国家技術監督局管理研究所

丘 光 明

1996年3月27日

共に切磋琢磨し、古代文明を掘り起こし、紹介しよう

「度量衡史と日本」座談会における挨拶

中国と日本とは一衣帯水の隣国であり、古くから経済的及び文化的交流が頻繁に行われたことは、両国の社会的発展の面で、また、様々な分野において直接的あるいは間接的な影響を与え合いましたし、日中両国の何世代にも亘る友好の基礎ともなったものでありました。

7世紀に、日本から中国に派遣された遣隋使及び遣唐使の中には、留学生も僧もいまして、彼等は中国において、規則制度、文化技術、仏教教典及び医学、科学等を勉強しました。中国の養蚕・糸取り・紡織・製陶・水車等の技術も次々と日本に伝えられたのです。度量衡の技術についても唐代から交流が始まっています。

現在、日本の奈良市にある正倉院には精巧に細工された象牙尺が6本収蔵されています。中国の学者王国維先生の1920年代の著作『唐六典』の中に、中尚署は毎年二月二日に彫刻を施した象牙尺の献納を命じ、朝廷ではこれを大臣や外国の使節に対する褒美として与えたと記載されています。象牙に彫刻を施したり、着色したりする方法は盛唐期に流行っていた素晴らしい工芸技術でした。正倉院に収蔵されている6本の象牙尺は日本の天平勝宝8年（中国の唐の肅宗至徳元年、紀元756年）に、孝謙天皇の皇太后が東大寺に献納したものであり、その手書きの原文及び献納品目録によると、この6本の尺はいずれも唐尺であるとのこと、このことは1926年及び1927年に出版された『東瀛珠光』という本にも収録されており、藤田元春氏の著書『尺度綜考』の中にも、正倉院に収蔵されている唐尺及び唐尺の複製品26点を実測したとの記載があります。日本の神戸市の白鶴美術館にも唐代の象牙尺が2本収蔵されており、こうしたものはいずれも友好の使者たちが中国から日本に持ち帰ったものであります。中国の上海博物館にも彫刻を施した象牙尺が1本収蔵されています。唐の象牙尺が日中両国の度量衡技術交流の歴史的証拠となっています。1240年以上の長い歳月を経て、今日、ここに私たち日中両国の度量衡史学者たちが一堂に会し、両国の間にかく

も長い文明史があり、かくも悠久な伝統のある友誼が存在していることに対して、私はこの上ない光栄と誇りを感じずにはられません。

唐の文宗の開成年間（紀元836～840年）に、日本の名僧圓仁が中国楊州の開元寺で学んでおり、彼のその時の日記『入唐求法巡礼行記』の中には、唐代の風土と人情についての描写が数多く記述されており、開成3年（838年）8月26日及び10月14日の日記には、衡器を使用して金子の重量を測る様子がきめ細かく書かれています。これは我々が唐代の衡器の重量単位の大小制を研究する上で大変貴重な資料となっています。

日本には度量衡史の研究、その中でも特に中国の度量衡史の研究に専念しておられる有名な学者が数多くおいでになり、度量衡史の研究著書及び中国古代度量衡史の研究論文も多数発表されていて、学術的レベルが極めて高いことを示しています。

日本の初期の学者荻生徂徠（物茂卿）によって享保18年（1733年）に出版された『度量衡考、度考』という本の中には、彼が日本の曲尺で唐の開元通宝銭の直径を測ってみたところ、その長さがやはり8分であったことから、「吾が邦の尺は唐製を真似たものである」ことが解ったと記されており、これは当時の日本の尺は唐の大尺をそのまま採用したものであったことを証明しています。その後、西山武一、熊代幸雄の『校訂訳注齊民要術』の上巻（昭和32年、1957年出版）の「解説」の中にも、唐の1尺は今日の日本の1尺に当たることが記載されており、足立喜六の『長安史跡考』及び成島柳北の『明治新選泉譜』の中にも唐尺と日本の曲尺とは同じであるとの記載があります。これは中国唐代の度量衡が日本の度量衡に与えた影響を物語っています。

日本の近現代の学者による度量衡史の著書も数多くあります。小泉袈裟勝先生は1974年～1982年の間に『度量衡の歴史』、『歴史の中の単位』、『ものさし』、『枘ます』、『秤はかり』等の著書を出版し、相当の紙面をさいて中国の度量衡について紹介しています。最近では、濱添 猛 先生が1995年に出版した著書『中国古代用尺の変遷と田制』等があり、いずれも度量衡専門書として学術的レベルの非常に高いものです。

中国度量衡史に関する研究論文も数多く発表されており、日本の学者林巳奈夫氏は中国の東周金村の銅紡に使われていた重量単位を研究して、1 𥝌はおよそ1

230グラムに当たることを突き止めました。松丸道雄先生は研究論文『西周時代の重量単位』を発表され、岩田重雄先生は研究論文『先秦時代の尺度』を発表されておられます。我々は道を同じくする日本の専門家たちの学問に対する真摯な態度に敬意を表し、皆様の度量衡史学研究における成果を祝福したいと思います。

1985年、日本の山田慶児先生と浅原達郎先生とにより、我々が書いた『中国古代度量衡図集』が日本語に翻訳され、出版されました。これによって中国の度量衡史の研究成果が日本の友人たちに紹介され、日本の歴史学界の注目を浴びました。我々は山田、浅原両先生のお骨折りに対し、心より感謝の意を表したいと思います。

ここ何年かの間、岩田先生と丘光明女史の積極的な働きかけのお陰で、両国間の度量衡史界の同志たちの友情が一層深まり、情報交換、相互訪問、学術的活動を行ってきました。我々は日本の同志たちと共に切磋琢磨し、日中両国の古代文明を掘り起こし、紹介していく上でそれぞれ力の及ぶ範囲で貢献したいと考えています。このたび、岩田先生を団長とする度量衡訪中団が中国に視察旅行に来られましたことに対して、我々は熱烈に歓迎の意を表すると共に、皆様の旅が楽しいものでありますよう、また、視察の方でも大きな成果が得られますよう、心からお祈りいたします。有り難うございました。

邱 隆

1996年3月27日

中国歴史博物館、陝西歴史博物館、上海博物館等で面会した人たちを表4に示した。

表4 その他の面会者

中国歴史博物館	館員	管理部主任	馬秀銀
陝西歴史博物館	館長	教授	周天游
〃	館員		師小群
鄭州大学文博学院	院長	教授	関増建
上海博物館	副院長	研究員	陳佩芬
〃	館員	民族学主任	范明三

これらの博物館では貴賓室や特別室で、貴重な計量器を見せてもらった。これらの計量器と丘氏の著書の番号の関係は表5に示した。

表5 特別に見学した計量器

館名と名称	年代	丘光明著
		中国歴代度量衡考の計量器番号
中国歴史博物館		
竜紋銅尺	東漢	尺-66
銅尺	東漢	
銅尺	明	
右里銅量	戦国・斉	量-5
成化兵子銅量	明	量-176
右伯君銅権	戦国・斉	権-2
始皇詔八斤銅権	秦	権-96
官臬銅権	西漢	権-147
始建国元年銅権	新	権-164
陝西歴史博物館		
銅曲尺	西漢	
銅方升	宋	
始元九年銅権	元	
上海博物館		
撥鏤牙尺	唐	尺-162
陳純銅釜	戦国・斉	量-7
左関銅鉶	戦国・斉	量-8
商鞅銅方升	戦国・斉	量-12
光和大司農銅斛	東漢	量-137
元初大司農銅斛	東漢	量-141

この中の銅曲尺は寸を2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11等分している特殊なものである。陝西歴史博物館の師小群氏と韓建武氏は陝西歴史博物館館刊(3)1996の173~177頁に「陝西歴史博物館新征集文物選釈」と題し、この尺度についてつぎのように書いている。

漢代の銅矩

1994年4月に陝西省子長県城関桃園村で出土したもの。この矩尺は幅が0.7cm、厚さが0.4cmで、垂直に交差する2本の長さが異なる直尺からなっている。長辺は23cm、短辺は11.5cm、それぞれ漢代の1尺と半尺にあたる。長辺の両面とも目盛りがあって、十等分に分けており、一等分は漢の1寸に当たる。表面の奇数寸内には分度線がなく、偶数寸内に分度線があり、それぞれ2、3、4、5、6等分である。裏面の奇数寸内に分度線が刻まれており、それぞれ7、8、9、10、11等分である。偶数寸には分度線がない(図1)。短辺は両面の目盛が同様に5等分されている。

矩尺は曲尺ともいい、又魯班尺ともいう。「史記・夏本紀」には、禹曰く：「卑官が費於減に致す……左準繩、右規矩、載四時、開九州、通九道、陂九澤、度九山」とある。「規」は円を校正する工具であり、「矩」は方形を描く曲尺である。「周髀」には矩の使用法が載っており、それによると「周公曰く：矩の使い方を尋ねたい。商高曰く：矩を平らにして繩を正し、矩をふせて高を望み、矩を復して深を測り、矩を臥して遠を知る」となっている。その意味するところは、曲尺を全体平らにすることは即ち矩を臥すことであり、二つの目的物間の距離を測る場合に使われ、矩の一方の直尺を直立させ、片方の直尺を平らにすることは即ち遠方にある目的物の高さを測る場合に使われる。矩を復して深さを測る。このように矩尺一つで高さ、深さ、幅、奥行きを測る幾つもの機能を有していることが分かる。

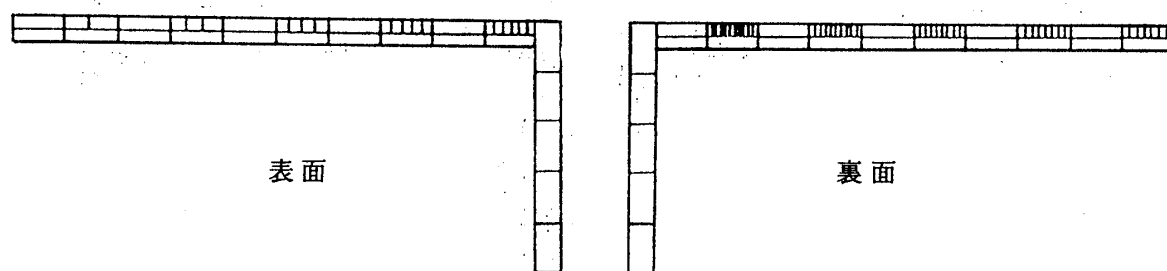


図1 銅矩の表面・裏面の目盛図

漢の石像には規矩を持っている伏羲、女媧像が多く現れる。安徽省寿県朱家集でも両辺が同じ長さの戦国銅矩が出土したことがある。中国歴史博物館には両辺の長さが異なる漢の銅矩が収蔵されている。その長さはそれぞれ22.5 cm及び37.6 cmである。この区の両辺はそれぞれ23 cm及び11.5 cmであるのに対し、建武の銅尺の長さは23.088 cm、始平銅尺の長さは23.79 cm、漢の鑲牙尺の長さは23 cm、羅振王収蔵の銅尺の長さは24.49 cm、漢の塗金尺の長さは28.85 cmであり、このことから漢代の一尺の長さは基本的に22.8～24.5 cmの間にあり、最も多いのは23 cmであることが分かる。この矩は一般の矩の機能を有しているほか、普通の尺としても使用することができ、非常に実用的である。

これに類似した例は曲尺と直尺、年代、地域は異なるが西アジアにある。2141～2122B. C. ごろ、メソポタミアのラガシュ王であったグデアの坐像に彫刻してある尺度の1シュ・シ(1.68cm)が2, 3, 4, 5, 6等分されていた。(本誌の表紙の写真および表紙裏の説明参照)これらの尺度は東アジアと西アジアにおけるそれぞれ唯一の例であり、用途について多くの研究が行われることが望まれる。

旅行計画は中信旅遊総会社と21世紀旅行が練り上げたものであったが、旅行中に丘氏を中心に中信旅遊総会社の全線ガイドの董春秋氏、各地の旅行者のガイド、そして出発から帰国まで終始旅行の世話をした下だった21世紀旅行の谷口弘人氏が、その都度協議して見学コースの変更や見学場所の追加が行われた。そのため表2に見られるように中身の濃い旅行になった。

特に鄭州では、前夜の午前2時まで出張しておられた鄭州大学 文博学院 院長の関増建氏が、鄭州玉石工場の展示場で講演されたのも、丘氏のねばり強い交渉のお蔭であった。その題名は「中国計量史における鄭州の地位」であった。その要旨はつぎの通りである。

「鄭州は商城ともいわれ、中国科学院による墨の年代測定では、3500年前にさかのぼる古い都市である。1995年に鄭州大学の考古学研究所による商双橋における新しい発見で、鄭州が商(紀元前16～11世紀)の都であることがわかった。当時はすばらしい青銅器が数多く鑄造され、誤差は数mm以内であった。商代の文献によっても、そのころ計量技術が高度に発達していたことがわかる。商の時代は中国の中心地は開封、洛陽、鄭州であった。度量衡制度の改革は主としてこの地方で行われた。

計量史の範囲は天文、空間、時間までを含む広大なものである。暦法の計算は棒(ノーマン)を地上に垂直に立て太陽の影の長さをはかって夏至、冬至や方位を定め、夜は星の通過をはかって恒星年の回帰を知ることができた。古代人は鄭州から10kmはなれた告成を世界の中心と考えており、ここを原点としていた。劉焯は唐代にこの地で正確な恒星年の計量を行った。周公測景台は唐代に作られ、元代には郭守敬により高さ40尺の石造の台に作り変えられた。郭によりはかられたデータと現代のデータとはほとんど一致している。中国の計量史を研究するには、鄭州をぬきにしては考えられない程重要なものである。」

中国には古代から天はかさのように地を覆って丸く、地は平で4角(方)形であるという思想があった。この天円地方説(第1蓋天説)の起源は西周(紀元前11～紀元前8世紀)以前までさかのぼるものと考えられている。上海博物館の本館は工事中で見学できなかったが、上部は丸く下部は方形で、天円地方の古代説を建物の形としている。中国の宇宙論は第2蓋天説、渾天説と続き、2世紀までに無限の空間を論じた宣夜説まで発展した。

上海博物館の収蔵庫(檔案館)では、商鞅銅方升をはじめ国宝級の計量器を見学した。丘氏は「これらを見たいと思い、3回もここへ来たが見せてもらえなかった。今回見せてもらったのは、代表団が国賓的待遇をうけたものと思われる」と述懐された。

おわりに

度量衡の故里・中国を訪ねる旅は中国と日本の関係者の緊密な協力のお蔭で、大過なく終ることができた。ここに改めて関係各位に厚く御礼を申し上げる。

丘光明氏の1995年10月の来日により中日の計量史交流の道が拓かれた。今回の中国訪問を契機として、計量史交流がますます頻繁になることを希望する。